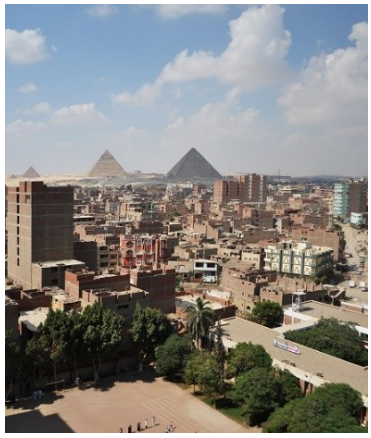
エジプト・アラブ共和国　　派遣期間　2013 年４月～2016 年３月

カイロ日本人学校　帰国報告

～　ピラミッドの見える街　～

石狩市立花川南中学校
教　諭　　稲　澤　　健

１　　エジプト・アラブ共和国について



カイロ日本人学校とピラミッド

（1）国　　名　　アラビア語でミスル（Misr），エジプト方言ではマスル

（2）面　　積　　約 100 万㎢（日本の約　2.6 倍）

（3）人　　口　　約 9,000 万人

（4）首　　都　　カイロ（人口約　2,000 万人）　※在留日本人：約 1,000 人

カイロはいろいろな人種が集まっている「雑多文化都市」である。カイロ北部はデルタ地方からの移民が多く，南部は上エジプトからの移民が多い。昔からカイロに住んでいる人は，「イブン エル バラット」と呼ばれ，東京でいう「江戸っ子」にあたる。カイロでは「隣組的思考」で，同じ道路に面して住んでいる人たちは，経済的，社会的に助[illegible]どもでもマナーなどを教える。しかし，現在は周辺のアラブ諸国や地方からの人口流入が激しく，このような伝統は失われつつある。また，アフリカ・中近東の要として西洋文化も流入し，個人主義的な西洋の考え方は，カイロの良さを少しずつ奪っているともいえる。

（5）民　　族　アラブ人（少数のヌビア人，アルメニア人，ギリシャ人等）

（6）主要言語　　アラビア語（エジプト方言）

当地での生活のほとんどはアラビア語（エジプト方言）。都市部や観光地，外国人居住地区では比較的英語が通じる。買い物などを通してアラビア語にふれる機会が多く，その中で在留日本人は日常生活に使われる言葉を習得している。

（7）宗　　教　　イスラム教スンナ派約 90% コプト教（原始キリスト教）約10%

（8）　　暦　　西暦とイスラム暦の二つが使われている。

通常の生活には西暦が使われるが，イスラムの習慣によると金曜日が礼拝のため，金曜日と土曜日が休日となる。イスラム暦はイスラムに関する行事のみに使われ，イスラム教関係の祝日（モハメッド聖誕祭，断食明けの休日，犠牲祭等）は毎年，およそ　11 日ずつ早まる。

イスラム教スンナ派の総本山モハメドアリモスク

（9） 産　　業　 農業（綿花，米，小麦など），鉱業，観光業など

2011年１月の政変で観光業は打撃を受けたが，一時は回復の兆しを見せていた。しかし，2013年７月の軍によるクーデターの後，治安の悪化，　IS等のイスラム過激組織によるテロ等により，観光業は大きなダメージを受けている。

（10） 教　育　 小学校6年制，中学校3年制の義務教育　高等学校3年制　大学4年制

基本的に日本と同じであるが，中学・高校では男女別修である。公立小中学校は児童生徒数に比して，校舎が慢性的に不足しており，午前と午後の2つに分かれている。午前と午後では学校名が違い，教員も全員入れ替わる。義務教育では進級テストや卒業試験が行われ，その結果で高等学校への進路先が決まる。富裕層は環境の整った私立校（ランゲージスクール）やインターナショナル校へ進学を選択することが多い。高等学校は，授業料が無料で，普通科と商業化が3年，工業科と農業科が5年制をとっている。

（11）気候・風土　 北部海岸地方の地中海性気候以外は，砂漠性気候

カイロ中心部を流れるナイル川

とにかく暑く，年間を通して雨はほとんど降らない。（年間約 10日間の降雨日数で，小雨程度。）夏の期間（５月～　10月）が長く，乾燥していて，戸外では40℃以上になることが何日もある。さらに日差しがとても強い。冬の期間（12月～２月）は短いが，室内でも夜や明け方には冷え込みが激しく，ジャンパーなどの冬用の上着や毛布などの寝具も必要となる。春（４月頃）になるとハムシーンと呼ばれる砂混じりの熱風が吹く。 2013年12月13日におよそ 122 年ぶりといわれる雪が降った。

（12）日本との関係

1936年にカイロに公使館を設置して以来，良好な関係を維持している。商社や報道関係などの日本企業の多くは，カイロに事務所を構え，中東・アフリカ地域の拠点としている。政府や JICA の代表的な援助プログラムとしては，カイロ大学附属小児病院，国立文化センター（通称オペラハウス），スエズ運河架橋，カイロ地下鉄，大エジプト博物館の建設（　2017年完成予定）が挙げられる。早稲田大学吉村作治教授（当時）により発掘された「第２の太陽の船」など，日本人研究者による考古学の研究が進められている。

★経済関係（輸入品目）

〇エジプト⇒日本天然ガス・石油，石油関連製品，繊維類など

〇日本⇒エジプト自動車等輸送機器，一般機械，電気機器など

★文化関係

中東・アフリカ地域において唯一，大使館内の広報文化センターと国際交流基金事務所を構え，幅広い分野で広報・文化活動を行っている。

大砂嵐後援会のポスター

２　カイロ日本人学校の特色

平成２７年度卒業証書授与式

2012年（平成 24年）に開校 40周年を迎えた。開校当初の間借り校舎が児童生徒の増加に伴って手狭になり， 1988年（昭和 63年）に現在の新校舎に移った。新校舎建設時は，児童生徒 135 名，派遣教員 18名が在籍していた。今でこそ周囲にマンションが立ち並び，学校からピラミッドを望むには屋上に上がってや
だが，当時は学校周辺にはマンゴー畑が広がるだけで，ピラミッドの見える学校であった。（旧校舎時代には，アルピニストの野口健さん，直木賞作家の西加奈子さんが在籍していた。）

現在，日本人学校に在籍する児童生徒は，ほぼ全員がスクールバスで登下校している。その居住地域はナイル川に浮かぶゲジラ島のザマレック地区に5割（派遣教員は全家庭がザマレック地区に居住），日本大使館のあるマーディ地区に4割，他地区に1割と，比較的まとまった地域に居住している。しかし，治安状況の悪化によって，児童生徒がスクールバスで帰宅した後や休日など，友だち同士で交流する機会が減ってしまった。その分，学校では休み時間などには上級生と下級生との関わる機会が多くあり，うちとけた雰囲気の中でのびのびと生活を楽しんでいる。児童生徒会を中心とした縦割りでの活動（学年を解いた活動）が充実しており，和やかな雰囲気の中で，人と関わる資質が育ち，諸活動にその成果が発揮されている。

（1） 教育目標

豊かな国際感覚，高い学力，元気な身体で未来を拓く子どもの育成

～夢に向かって一つ一つ積み上げよう！～

（2） 目指す子ども像

〇豊かな国際感覚を持つ　〇高い学力を身に付けている　〇元気な身体をつくる

（3） 児童生徒数（平成28年１月現在）

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	小学部計	中1	中2	中3	中学部計	合計
男子	1	6	1	1	1	2	12	1	1	1	3	15
女子	1	2	1	0	2	1	7	1	2	0	3	10
合計	2	8	3	1	3	2	19	2	3	1	6	25

※

政

情不安，治安状況の悪化に伴い，児童生徒数に

休み時間　　そうじの風景

（4）カイロ日本人学校の一日

スクールバスにて　　ピラミッドタイム（低学年）

※日・火・木曜日は，帰りの会後，ピラミッドタイム（　30分間）を設け，小学部４年生以上は授業の補完，低学年は行事の準備や遊びの時間に充てている。

（5）特色ある教育活動

①カイロならではの行事

〇ピラミッド持久走（ 12月）・・・児童生徒とその家族が１　km ～４ km の４つの距離別コースにエントリーし，ピラミッドを背にして元気に駆け抜ける，カイロ日本人学校の目玉行事である。このコースはギザの三大ピラミッド区域にあり，考古省と観光警察に特別な使用許可を得て行っている。この時期は持久走に相応しいさわやかな気候で，ピラミッドも青空によく映える。

〇さばくハイキング（１月）・・・カイロ近郊に広く点在する世界遺産地区を子ども達が5つの縦割り班に分かれて，ハイキングを行う。地平線まで広がる砂漠を，全身を使って堪能できるとても贅沢な行事である。ダハシュール地区（屈折ピラミッド，赤ピラミッドで有名），サッカラ地区（世界最古のピラミッドである階段ピラミッドで有名），ギザ地区（三大ピラミッド，スフィンクスで有名）所を変えて行っている。

ギザの三大ピラミッドを背景に

7:40	登校バス到着
7:50～ 8:00	朝読書
8:00～ 8:05	朝の会
8:05～ 8:20	清掃
8:20～	1，2校時
9:55～10:15	中休み
～11:50	3，4校時
11:50～12:10	昼食
12:10～12:30	昼休み
～14:10	5，6校時
14:10～14:20	帰りの会
14:30or15:00	下校バス出発

②現地校交流・現地理解の充実

〇運動会（ 10月）・・・カイロ日本人会との共催で行われる運動　会は，毎年，カイロ大学など日本語

屈折ピラミッド

生と現地私立小中学校2校に参加を呼びかけている。参加する種目は，徒競走や綱引き，玉入れ， PTA種目である。交流体育や総練習で競技の練習を一緒に行い，ルールや順番などを守る指導をしている。赴任中は，現地理解として，エジプト南部の伝統的な戦闘の踊りである「サイーディ」に全校指導生徒で取り組み，エジプト人に大変好評だった。日本人学校最大の行事であり，日本人もエジプト人も，子どもも大人も大いに盛り上がる行事である。

※赴任２年目には，エジプト在住の日本人ベリーダンサー木村　カスミさんと楽団を招き，サイーディとその音楽を披露してもらう全校鑑賞会と教員向けの講習会（６回）を行った。運動会前には子ども達へ指導をしていただいた。

民族舞踊「サイーディ」

〇学習発表会（ 11月）・・・例年カイロオペラハウスで行われ，発表会は音楽発表と学習発表の二部構成である。音楽発表では，中東伝統の「タブラ」という打楽器の演奏を披露したり，学習発表で発表する劇でエジプトの歴史や民話と取り入れたり，「総合的な学習の時間」で学年ブロックごとに取り組む現地理解学習と直結させて取り組むことが多い。中学部は，職業観や将来の夢について，観客席の保護者も巻き込みながらのパネルディスカッションをステージで披露した。

〇現地校授業交流（ 12月）・・・ジャパンデーの前段として，小学部と中学部がそれぞれ近隣のランゲージスクール（現地私立校）へ訪問し，算数や体育，英語などの授業に参加する。日本人学校の教員も子ども達も，授業で用いる英語のレベルの高さにいつも驚かされる。

③職業講話・職場体験

〇職業講話・・・小学部高学年から中学部を対象に年に２～３回，企業や大使館などカイロで働くさまざまな業種の方の話を聞くことで，子ども達の視野を広げ，将来への目標や夢を持つきっかけとなるような大変有意義な機会となった。赴任した3年で，北海道新聞社，味の素，三井物産，日本貿易振興機構（ JETRO ），国連難民高等弁務官事務所（ UNHCR ），大使館の職員の方々を招いた。地域の優れた人材を生かした取り組みである。

在エジプト大使館参事官の職業講話

〇職場体験（９月）・・・中学部の総合的な学習の時間の中で実施される職場体験は，赴任１年目から始まった。生徒は日本食レストランのホールおよび調理，味の素の現地市場での手売り，読売新聞社の記者などを体験する。日程の調整や移動手段の確保，活動時の安全確保，受け入れ体制など課題が多いが，各事業所のご協力で毎年実施できている。

味の素を売る中学生

３　児童生徒の安全確保に費やした3年間

（1）治安状況の悪化に伴う一時待避の実際

2013年 4 月，赴任早々『食料の備蓄』『2，3日宿泊できる準備』『ドル札の確保』が指示された。米と水は機会を見つけて買いおきした。ドル札は銀行口座に入っているお金をすべて引き出して手元に置いておくようにした。6月末，主要な広場に大勢が押し寄せ，大規模な集会が始まった。7月3日についに軍部によるクーデターが起き，その影響で大規模なデモが全国各地に広がっていった。カイロでは幹線道路が治安部隊によって封鎖されるようになり，スクールバスの運行が困難と判断し，一時休校になっ

デモ隊の衝突（テレビ映像）

てしまった。自宅待機中は，毎日家庭連絡をし，安否確認と宿題の確認をした。業務上の職員間の連絡は，メールと電話で行い，携帯を片手にパソコンの前から動けない日が2週間続いた。結局1学期は最後の3日間だけ開校でき，夏休みに入った。

8月　14日，軍を中心とした治安部隊によるモルシ大統領派の強制排除が始まった。これにより，居場所を失ったモルシ大統領派が市内各地のモスク（イスラム教の教会）に立てこもったことが，治安部隊とモルシ派の衝突が市内各所で起こる原因となり，衝突は銃撃戦に発展した。14日の午後，治安悪化に先手を打つために夜間禁止令（　19時から6時まで）と非常事態宣言（逮捕状なしに拘束できるという治安当局の手間を省くためのもの）が出された。自宅で銃声を聞いたのは8月　16日午後2時頃。モルシ大統領派デモ隊の一部が近所の建物に向かって発砲したものだと後から聞いた。恐怖に怯えた。

＜一時待避までの動き＞

8月 14日	治安部隊による強制排除が始まる。カイロ各地で銃撃戦などの激しい衝突が始まる。非常事態宣言及び1か月間の夜間外出禁止令が発令される。
15日	校長から「明日渡航情報のレベルが上がり，文科省から退避の指示があるかもしれません。荷造りをしてください。」と電話で指示。
16日	連絡なし。少しずつ荷造り。午後2時頃，銃声におびえる。 19時頃，校長から全職員に待避時の具体的な役割分担をメールで指示。
17日	文科省より一時待避の指示。一時休校の連絡を各家庭に一斉メール送信。
18日	午前のみ出勤。現地職員への引き継ぎ。カイロに残る児童生徒に教材を渡す。
19日	荷造り，部屋の掃除，家賃の支払い（部屋のオーナーに事情説明）
20日	渋滞回避のため午前中に空港へ移動。12時頃空港に到着。17時40分カイロ発。
21日	ドーハ経由で 17時50分成田着。羽田空港近くに宿泊。
22日	9時 30分釧路着。実家へ。現籍校（恵庭中学校）へ連絡。文科省へ到着届を郵送。

（2）“スクールバスは学校の要”～スクールバスの安全運行と教員の役割

カイロ日本人学校のスクールバスは，日本人スタッフは乗車せずエジプト人だけ（警備員1名，ドライバー1名）で運行している。片道およそ40分を要し，場合によっては1時間を超える。2011年1月の革命以後，大使館と密に連携し，日常的にデモや暴動，爆弾テロ等の情報共有しながら適切にバスルートを設定している。学校運営委員会はスクールバス委員会を設置し，保護者委員3名と教員委員3名で月1回の定例委員会を開催し，お互いの立場で意見交換をしながらスクールバスの安全な運行に努めている。また，

学校は学校防護計画を策定し，緊急時の行動マニュアルを教職員と保護者で共有し，保護者バス委員をはじめ，全保護者の協力を得て，登下校時の避難訓練を実施してきた。

教員の入れ替わりが速いため，「スクールバスが安全に運行できない限りカイロ日本人学校は成り立たない」ということを教員が強く意識できるかが重要になってくる。

（3）避難訓練の実施

１年目はスクールバス委員，２年目はスクールバス副委員長（教頭職）としてスクールバス業務にかかわってきた。3年目は再びスクールバス委員を務め，さらに避難訓練も担当し，教職員およびエジプト人スタッフの危機管理能力の向上，保護者の安全意識の向上を目的として，年4回の訓練を年6回に増やし，初めてホテル引き取り避難訓練を実施した。

①逃げ込み避難訓練・・・年3回実施。武器を所持した不審者が学校を襲撃してきたことを想定。一度音楽室に逃げ，その後窓から脱出し，グラウンド非常口から隣のマンションへ逃げ込む。

②スクールバス避難訓練・・・　１，２学期に1回ずつ実施。大使館からの暴動注意情報を受け，早帰りを想定。スクールバスで各家庭を回り，保護者へ児童生徒を直接引き渡す訓練。保護者不在の場合は臨時預り所（他の保護者宅）に向かうなど，緊急時の連絡体制と児童の安全確保に関わる対応を教職員と保護者が確認する。

③ホテル引き取り避難訓練・・・3学期に実施。バスルート上での同時多発的なテロを想定。スクールバスによる帰宅が困難と判断し，学校近くのリゾートホテル（水泳学習で利用）に一時的に避難する訓練。保護者がホテルまで迎えに来るまで会議室で待機する。保護者が外へ出られない（迎えに来られない）場合もあるため，食料や寝具，警備も万全であるホテルへ移動する。

逃げ込み避難訓練

スクールバス避難訓練

ホテル引き取り避難訓練

題

が，教職　　行うこと

後の反　　細かな点

。教職員　　本制，ホ

でどの　　ることが

保護者のほとんどが一時待避を経験しておらず，安全への意識に温度差を感じていたが，今回の訓練では保護者の多くがホテルへ引き取りに来てくださり，意識の向上がうかがえた。さらに，年度最後の避難訓練ということもあり，上級生が低学年に声をかける姿が見られ，教師の指導の下，整然と行動することができた。

一方で，教職員の役割を明確にし，行動基準をもとにしつつ，急な対応を迫られる場面でも適切に判断できるようにしたり，児童生徒の不安を和らげるために，状況説明を適切に行ったりできるよう日頃からの心掛けが課題としてあげられた。

児童生徒の安全確保について保護者の関心は非常に高く，年度当初に行っている学校防護計画説明会にはほとんどの保護者が参加する。この説明会では，学校の安全管理方針を理解していただき，

安心していただくために重要な機会である。しかしながら，爆弾テロへの不安はいつもつきまとっており，日頃から学校でも家庭でもいろいろな状況を想定しておくことが大切になってくる。そういう意味では，ホテル引き取り避難訓練は大きな意義があったのではないだろうか。これからエジプト国内の治安情勢が安定し，今後もカイロ日本人学校の教職員と保護者が一体となって児童生徒の安全を守っていくことを願ってやまない。

４　エジプトでの生活

（1）食生活

日本食材店がなく，現地で購入できる日本食材があったとしても必ずしも日本製とは限らない。米は，JICA が普及させたエジプト米がおいしく，どこのスーパーでも購入できる。スイカやメロン，マンゴーなど，安価でとてもおいしく，野菜や果物は現地のもので十分に間に合う。豚肉は一般には流通していない。水道水は煮沸してから使用しなければならず，どの家庭もミネラルウォーターを購入し，ストックする 。浄水器を現地で購入したり，日本から持参したりして使用している人も少なくない。居住区近隣のホテルやレストランでは，世界各国の料理が楽しめるが，高価である。日本人の口にあう中国・韓国風レストランやすし屋，日本人による日本食レストランがあり，日本でよく見られるファーストフード店もいくつもある。

生水や生卵，生野菜は下痢の原因となり，強烈な腹痛を伴う。レストランの氷も例外ではない。

（2）住　居

カイロに赴任する日本人の多くは，諸外国の大使館が多くある比較的治安のよいエリアに，日本のマンション形式の住居に入居している。部屋はベッドルームの他に，リビング，キッチン，ダイニング，バス・トイレが基本となる。ベッドルームの数で部屋の規模の大きさを表す。家具付きが多く，布団やまくらなどの寝具，エアコンや冷蔵庫，洗濯機，テレビなどの電化製品等も一般的に付属している。

（3）医療事情

カイロ市内には各種の病院があり，入院，手術，出産も可能で，日本語のできる眼科医がいる。しかしながら，公立の病院は衛生的に問題があるとされ，在留外国人は質の高い医師や施設を持つ私立の病院に行くことになる。

（4）交通事情

カイロでの主たる交通機関は，路線バス，タクシー，乗合タクシー，地下鉄であるが，外国人が痴漢やスリといった犯罪の加害者となる事案が多く，また，地下鉄では爆発物による事件が相次いだため，利便性が低い。自家用車を所有するエジプト人は少なくないが，渋滞や交通事故が多く発生し，また交通ルールやマナーが日本とかなり異なるため，多くの在留日本人は，自家用車を購入し，運転手を雇い入れるか，レンタカー会社と契約し，運転手付きの車を借りるか，タクシーと契約するかして通勤等に利用している。

派遣教員は，レンタカー会社との契約システムが確立され，全員がレンタカーを使用している。ガソリン代やメンテナンス，修理などのわずらわしい部分を会社がカバーしてくれるという利点がある。通勤は学校まで約 20㎞で， 25～30分かかる。児童生徒は，添乗員同乗のスクールバスによる登下校を行っている。早朝は車の流れがスムーズであるが，通勤時間帯から夜間にかけて，渋滞することが多く，片道１時間以上かかることも多い。

（5）娯　楽

秋祭りでの盆踊り

在留日本人の余暇の楽しみ方は様々である。カイロ日本人会主催の秋祭り（日本人学校が会場）とソフトボール大会（年2回，日本人学校チームも参加）はいつも多くの日本人で盛り上がる。テニスやゴルフなどのスポーツ系のサークルの他，茶道や合唱などの文化系サークルがあり，それぞれが規模の大小にかかわらず年に数回イベントを行っている。また，子ども達の習い事として，ピアノ，英会話，サッカー，空手，柔道など意外なほど多種であるが，その多くは在留外国人が指導者であることが多い。

（6）観　光

エジプトといえばピラミッドや砂漠のイメージだが，世界中からダイバーが訪れる，ダイビングの盛んな観光地も存在する。カイロから車で2時間走れば，アインソフナという保養地がある。海沿いには別荘が建ちならび，プライベートビーチがいくつもある。シャルム・エル・シェイクは世界でも有数のダイビングポイントで，シーズンにはヨーロッパ各地を結ぶ往復便が運行する。残念ながら，今年，ロシア行きの飛行機がテロ攻撃を受けて墜落したため，観光客が激減している。

5　3年間を振り返って

カイロの1日は，早朝5時のアザーン（1日5回大音量で町中に響き渡るイスラムのお経）から始まり，イスラム教の国であることを実感する。カイロ日本人学校はカイロ市街から離れているため，舗装されている道路も少ない。往来する荷車を引くロバ，トゥクトゥク（バイクタクシー），すし詰めのマイクロバス，窓ガラスのないスクールバス，その道端には無数のゴミ。

街を歩いているとエジプト人のおじさん達によく声をかけられる。「中国人か？」と聞かれ，「日本人だ」と答えると握手を求められ，少しでもアラビア語を使うものなら，とても親しげに話しかけてくる。彼らは路地の椅子に腰掛け，シャーイ（紅茶）を飲みながら水タバコをふかし，一日中おしゃべりしている。親日のおしゃべり好きは評判通りで，地下鉄や博物館，オペラハウスなど日本がかなり援助し，エジプト社会に大きく貢献しているからだと，私が雇っているエジプト人運転手が教えてくれた。彼もまた，家族に対して優しくしてくれ，アラビア語を教えてくれる。

3年間を振り返ると，不安なことや辛いことが多々あった。そういう中でも，エジプト人の友人達に支えられ，同じく日本から派遣されている教員とその家族に支えられた3年間だった。

通じないアラビア語，直らない冷蔵庫，待っても来ない洗濯屋さん・・・。イライラしていると，「インシャアッラー（神がお望みならば）」で何事も解決してしまう大らかなエジプト人に，時間が経つにつれ，心を奪われていった。日本人が忘れてしまったものを教えてもらったような気がする。

古代エジプト人のロマンを感じさせる街，じりじりと照り付ける太陽，ナイル川のさわやかな風，突き抜ける青空，真っ赤に燃える火炎樹，どれも愛おしい風景である。すべての方々に感謝しつつ，これらの貴重な経験を今後の教育活動に活かすことができるよう，子ども達のために尽力したい。